

公益財団法人図書館振興財団
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録
■フィクションの部■

公益財団法人図書館振興財団 児童書選書委員会
岩村 陽恵

「児童書選書委員会」でフィクションとして取り上げられた作品を中心に、評価が良かった本、評価が分かれた本、出版業況や時世の点から注目した本などについて紹介します。

◆2018年のフィクションの傾向

- ・高学年からヤングアダルト向けの力強い作品の出版の多さ
- ・「生きることに困難さを抱える」主人公
- ・ファンタジーの少なさ
- ・復刊の減少

◆日本の文化・歴史

- ・ここ数年、日本の文化や歴史をテーマとした作品が目立つ
- ・取り上げる素材の幅も広がっている

◆スポーツ

- ・スポーツとそれぞれの生き方

◆平和を求めて

- ・難民について

◆家族

- ・父親との関係

◆学校と友達

- ・生きることに困難さを抱える子どもたちが学校で…
- ・自由研究

◆新訊

- ・児童文学の古典、注目の新訊

■日本の文化歴史

	小高	『大坂オナラ草紙』/谷口 雅美・著, イシヤマ アズサ・画/講談社/2018. 6/¥1300/(913. 6)
	小高・中学	『兄ちゃんは戦国武将!』(くもんの児童文学)/佐々木 ひとみ・作, 浮雲 宇一・画/くもん出版/2018. 6/¥1300/(913. 6)
	小高・中学	『龍にたずねよ』/みなと 董・著/講談社/2018. 7/¥1200/(913. 6)
★	小高	『天からの神火』(文研じゅべに一る)/久保田 香里・作, 小林 葉子・絵/文研出版/2018. 10/¥1400/(913. 6)
★	小高・中学	『さよ 十二歳の刺客』(くもんの児童文学)/森川 成美・作, 榎 えびし・画/くもん出版/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	小高	『星の旅人 伊能忠敬と伝説の怪魚』/小前 亮・著/小峰書店/2018. 12/¥1600/(289. 1)

■スポーツ

	小高	『ビワイチ! 自転車で琵琶湖一周』(文研じゅべに一る)/横山 充男・作, よこやま ようへい・絵/文研出版/2018. 4/¥1300/(913. 6)
	小高・中学	『セパ!』(ノベルズ・エクスプレス)/虹山 つるみ・作, あきひこ・絵/ポプラ社/2018. 7/¥1300/(913. 6)
	小高・中学	『流星と稲妻』/落合 由佳・著/講談社/2018. 9/¥1400/(913. 6)
★	小高	『ぼくらの一歩 30人31脚』/いとう みく・作, イシヤマ アズサ・絵/アリス館/2018. 10/¥1400/(913. 6)
	小高	『ジャンプ!ジャンプ!ジャンプ!!』(ノベルズ・エクスプレス)/イノウエ ミホコ・作, またよし・絵/ポプラ社/2018. 10/¥1300/(913. 6)
	小高・中学	『変化球男子』(鈴木出版の児童文学)/M. G. ヘネシー・作, 杉田 七重・訳/鈴木出版/2018. 10/¥1600/(933. 7)
★	小高・中学	『その魔球に、まだ名はない』/エレン・クレイジス・著, 橋本 恵・訳/あすなろ書房/2018. 11/¥1400/(933. 7)

■平和を求めて

	小高・YA	『はるかな旅の向こうに』/エリザベス・レアード・作, 石谷 尚子・訳/評論社/2017. 12/¥1600/(933. 7)
	小高・中学	『ようこそ、難民! 100万人の難民がやってきたドイツで起こったこと』/今泉 みね子・著/合同出版/2018. 2/¥1500/(334. 434)
	小高・一般	『母が作ってくれたすごろく ジャワ島日本軍抑留所での子ども時代』/アネールト・ウェルトハイム・文, 長山 さき・訳/徳間書店/2018. 6/¥1600/(949. 36)
	小高・中学	『ガラスの梨 ちいやんの戦争』(ノベルズ・エクスプレス)/越水 利江子・作, 牧野 千穂・絵/ポプラ社/2018. 7/¥1500/(913. 6)
★	小高	『マンザナの風にのせて』(文研じゅべに一る)/ロイス・セパバーン・作, 若林 千鶴・訳, ひだかのり子・絵/文研出版/2018. 6/¥1500/(933. 7)

	小高・YA	『ある晴れた夏の朝』/小手鞠 るい・著/偕成社/2018. 8/¥1400/(913. 6)
★	小高・中学	『風がはこんだ物語』/ジル・ルイス・文, ジョー・ウィーヴァー・絵, さくま ゆみこ・訳/あすなろ書房/2018. 9/¥1400/(933. 7)
★	小高・YA	『マレスケの虹』(Sunnyside Books)/森川 成美・作/小峰書店/2018. 10/¥1500/(913. 6)
★	小高	『トンネルの向こうに』/マイケル・モーパーゴ・作, 杉田 七重・訳/小学館/2018. 11/¥1300/(933. 7)
	小高	『願いごとの樹』/キャサリン・アップルゲイト・作, 尾高 薫・訳/偕成社/2018. 12/¥1500/(933. 7)

■家族

★	小高	『ペーパープレーン』(ブルーバトンブックス)/スティーブ・ワーランド・作, 井上 里・訳/小峰書店/2017. 12/¥1400/(933. 7)
	小高・中学	『キツネのボックス 愛をさがして』/サラ・ペニーパッカー・作, ジョン・クラッセン・絵, 佐藤 見果夢・訳/評論社/2018. 1/¥1500/(933. 7)
	小中・小高	『チャルーネ』/ホーコン・ウーヴレオース・作, オイヴィン・トールシェーテル・絵, 菱木 晃子・訳/ゴブリン書房/2018. 7/¥1400/(949. 63)
	小高	『いいたいことがあります!』/魚住 直子・著, 西村 ツチカ・絵/偕成社/2018. 10/¥1400/(913. 6)
★	小高・中学	『ソロモンの白いキツネ』/ジャッキー・モリス・著, 千葉 茂樹・訳/あすなろ書房/2018. 10/¥1200/(933. 7)
	小高	『ユンボのいる朝』/麦野 圭・作, 大野 八生・絵/文溪堂/2018. 11/¥1300/(913. 6)

■学校と友達

	小高	『ぼくらの山の学校』(わたしたちの本棚)/八束 澄子・著/PHP研究所/2018. 1/¥1400/(913. 6)
	小高	『となりの火星人』(講談社・文学の扉)/工藤 純子・著/講談社/2018. 2/¥1400/(913. 6)
	小高・中学	『ひとりじゃないよ、ぼくがいる』/サイモン・フレンチ・作, 野の 水生・訳/福音館書店/2018. 3/¥1700/(933. 7)
★	小中	『消えた時間割』(ジュニア文学館)/西村 友里・作, 大庭 賢哉・絵/学研プラス/2018. 5/¥1300/(913. 6)
★	小高・中学	『ドリーム・プロジェクト』(わたしたちの本棚)/濱野 京子・著/PHP研究所/2018. 6/¥1400/(913. 6)
★	小中・小高	『凸凹あいうえおの手紙』/別司 芳子・著, ながおか えつこ・絵/くもん出版/2018. 6/¥1400/(913. 6)
	小高	『メロンに付いていた手紙』/本田 有明・文, 宮尾 和孝・絵/河出書房新社/2018. 6/¥1300/(913. 6)
	小中	『こだわっていこう』(ジュニア文学館)/村上 しいこ・作, 陣崎 草子・絵/学研プラス/2018. 7/¥1300/(913. 6)

	小中・小高	『秘密基地のつくりかた教えます』(ノベルズ・エクスプレス)/那須 正幹・作, 黒須 高嶺・絵/ポプラ社/2018. 8/¥1300/(913. 6)
	小高	『星を見あげたふたりの夏』/シンシア・ロード・著, 吉井 知代子・訳, 丹地 陽子・絵/あかね書房/2018. 8/¥1400/(933. 7)
★	小高	『明日のランチはきみと』(フレーベル館文学の森)/サラ・ウィークスほか・作, 久保 陽子・訳/フレーベル館/2018. 10/¥1400/(933. 7)
	小高	『右手にミミズク』(フレーベル館文学の森)/蓼内 明子・作, nakaban・絵/フレーベル館/2018. 10/¥1400/(913. 6)
	小低・小中	『学校へ行こう ちゃんとりん』/いとう ひろし・作/理論社/2018. 11/¥1250/(913. 6)
	小中・小高	『落語ねこ』/赤羽 じゅんこ・作, 大島 妙子・絵/文溪堂/2018. 11/¥1300/(913. 6)
	小高	『昨日のぼくのパーツ』/吉野 万理子・著/講談社/2018. 12/¥1400/(913. 6)
★	小高	『ジュリアが糸をつむいだ日』/リンダ・スー・パーク・作, ないとう ふみこ・訳, いちかわ なつこ・絵/徳間書店/2018. 12/¥1600/(933. 7)
	小高	『ゆかいな床井くん』/戸森 しるこ・著/講談社/2018. 12/¥1300/(913. 6)

■幼年文学

	小低	『おとうさんとあいうえお』(ことばのひろば)/東 君平・さく・え/廣済堂あかつき/2018. 1/¥1300/(913. 6)
	小低	『ぼくはなんでもできるもん』(本はともだち)/いとう みく・作, 田中 六大・絵/ポプラ社/2018. 3/¥1000/(913. 6)
	小低	『ソラタとヒナタ ともだちのつくりかた』(わくわくライブラリー)/かんの ゆうこ・さく, くま あやこ・え/講談社/2018. 4/¥1300/(913. 6)
	小低	『ゲンちゃんはおサルじゃありません』(どうわがいっぱい)/阿部 夏丸・作, 高畠 那生・絵/講談社/2018. 5/¥1200/(913. 6)
	小低	『ホイホイとフムフム たいへんなさんぽ』/マージョリー・ワインマン・シャーマット・文, バーバラ・クーニー・絵, 福本 友美子・訳/ほるぷ出版/2018. 5/¥1400/(933. 7)
★	小低	『ふたごのカウボーイ』/フローレンス・スロボドキン・文, ルイス・スロボドキン・絵, 小宮 由・訳/瑞雲舎/2018. 6/¥1300/(933. 7)
★	小低	『こだぬきコロッケ』(こぐまのどんどんぶんこ)/ななもり さちこ・作, こば ようこ・絵/こぐま社/2018. 6/¥1200/(913. 6)
	小低	『ヨッちゃんのおわむし』(本はともだち)/那須 正幹・作, 石川 えりこ・絵/ポプラ社/2018. 7/¥1000/(913. 6)
	小低	『ふたりはとっても本がすき!』(おはなしだいすき)/如月 かずさ・作, いちかわ なつこ・絵/小峰書店/2018. 7/¥1100/(913. 6)
	小低	『きっちり・しとーるさん』(こぐまのどんどんぶんこ)/おの りえん・作・絵/こぐま社/2018. 9/¥1200/(913. 6)
	小低	『ぼうけんはバスにのって』/いとう みく・作, 山田 花菜・絵/金の星社/2018. 9/¥1200/(913. 6)
	小低	『おばあちゃんのわすれもの』/森山 京・作, 100%ORANGE・絵/のら書店/2018. 11/¥1300/(913. 6)

★	小低	『二年二組のたからばこ』(だいすき絵童話)/山本 悦子・作, 佐藤 真紀子・絵/童心社/2018. 11/¥1000/(913. 6)
---	----	---

■その他

	小高	『世にもおそろしいフクロウおばさん』/デイヴィッド・ウォリアムズ・作, 三辺 律子・訳, 平澤 朋子・絵/小学館/2018. 1/¥1500/(933. 7)
	小低・小中	『イースターのたまごの木』/キャサリン・ミルハウス・作・絵, 福本 友美子・訳/徳間書店/2018. 2/¥1700/(933. 7)
★	小中	『パイパーさんのバス』/エリナー・クライマー・作, クルト・ヴィーゼ・絵, 小宮 由・訳/徳間書店/2018. 2/¥1400/(933. 7)
★	小高	『青い月の石』(岩波少年文庫)/トンケ・ドラフト・作, 西村 由美・訳/岩波書店/2018. 2/¥760/(949. 33)
	小高	『波うちぎわのシアン』齊藤 倫・著, まめふく・画/偕成社/2018. 3/¥1800/(913. 6)
	小中	『石井桃子 子どもたちに本を読む喜びを』(伝記を読もう)/竹内 美紀・文, 立花 まこと・画/あかね書房/2018. 4/¥1500/(910. 268)
	小高	『たかが犬、なんて言わないで』(文研じゅべにーる)/リブ・フローデ・作, 木村 由利子・訳, 柴田 文香・絵/文研出版/2018. 6/¥1400/(949. 63)
	小中	『わたしといろんなねこ』/おくはら ゆめ・作絵/あかね書房/2018. 6/¥1200/(913. 6)
★	小中	『ねこの商売』(福音館創作童話シリーズ)/林原 玉枝・文, 二俣 英五郎・絵/福音館書店/2018. 9/¥1300/(913. 6)
	小中～一般	『クリスマスのあかり チェコのイブのできごと』(世界傑作童話シリーズ)/レンカ・ロジノフスカ・作, 出久根 育・絵, 木村 有子・訳/福音館書店/2018. 10/¥1600/(989. 53)
	小中・小上	『魔女が相棒? ねぐせのヤマネ姫』/柏葉 幸子・作, 長田 恵子・絵/理論社/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	小上	『ぼくとニケ』/片川 優子・著/講談社/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	小中	『野生のロボット』/ピーター・ブラウン・作・絵, 前沢 明枝・訳/福音館書店/2018. 11/¥1900/(933. 7)
	小中	『エレベーターのふしぎなボタン』(本はともだち)/加藤 直子・作, 杉田 比呂美・絵/ポプラ社/2018. 11/¥1000/(913. 6)
	小低・小中	『ぼくの、ミギ』(わくわくライブラリー)/戸森 しるこ・作, アン マサコ・絵/講談社/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	小中	『リスの森ひっこし大作戦』/リン・レイ・パーキンス・作・絵, 斎藤 倫子・訳/偕成社/2018. 12/¥1600/(933. 7)
	小高・中学	『地底旅行』(岩波少年文庫)/ジュール・ヴェルヌ・作, 平岡 敦・訳/岩波書店/2018. 11/¥840/(953. 6)
	小中	『オポッサムはないてません』(こころのかいだんシリーズ)/フランク・タシュリン・文・絵, 小宮 由・訳/大日本図書/2018. 12/¥1400/(933. 7)
	小中	『ぼくはくまですよ』(こころのかいだんシリーズ)/フランク・タシュリン・文・絵, 小宮 由・訳/大日本図書/2018. 12/¥1400/(933. 7)

■神話・昔話・詩

★	小中・小高	『古事記 日本のほじまり』/齊藤 洋・文, 高島 純・絵/講談社/2018. 7/¥1300/(913. 2)
★	小低	『千びきおおかみ 日本のこわい話』(こぐまのどんどんぶんこ)/筒井 悦子・再話, 太田 大輔・絵/こぐま社/2018. 2/¥1200/(913. 6)
★	小低	『カテリネッタとおにのフライパン イタリアのおいしい話』(こぐまのどんどんぶんこ)/剣持 弘子・訳・再話, 剣持 晶子・絵/こぐま社/2018. 9/¥1200/(973)
	小中・小高	『コヨーテ七人の巨人とたたかう アメリカインディアンのおはなし』/高野 由里子・編・訳, 古沢 たつお・絵/風濤社/2018. 4/¥1400/(995. 23)
★	小低～	『こどもあそびうた』/谷川 俊太郎・詩, 山田 馨・編/童話屋/2018. 6/¥1500/(911. 56)

■新訳

★	小高	『ハックルベリー・フィンの冒険 上・下』(岩波少年文庫)/マーク・トウェイン・作, 千葉 茂樹・訳/岩波書店/上・下ともに2018. 1/上・下ともに¥760/(933. 6)
	小高	『バレエ・シューズ』/ノエル・ストレットフィールド・著, 中村 妙子・訳/教文館/2018. 1(すぐ書房 1979年刊の新訳)/¥1300/(933. 7)
★	小高	『アンデルセンのおはなし』/ハンス・クリスチャン・アンデルセン・著, スティーブン・コリン・英語訳, エドワード・アーディゾーニ・選・絵, 江國 香織・訳/のら書店/2018. 5/¥2500/(949. 73)
★	小中・小高	『長くつ下のピッピ』(リンドグレーン・コレクション)/アストリッド・リンドグレーン・作, イングリッド・ヴァン・ニイマン・絵, 菱木 晃子・訳/岩波書店/2018. 8/¥1650/(949. 83)
	小中・小高	『ピッピ船にのる』(リンドグレーン・コレクション)/アストリッド・リンドグレーン・作, イングリッド・ヴァン・ニイマン・絵, 菱木 晃子・訳/岩波書店/2018. 12(原著改訂版の翻訳)/¥1650/(949. 83)

■復刊など

	小高～	『熊とにんげん』/ライナー・チムニク・作・絵, 上田 真而子・訳/徳間書店/2018. 1(偕成社 1982年刊に若干の訳語と文字使い、レイアウトの変更を加えたもの)/¥1400/(943. 7)
	小高～	『タイコたたきの夢』/ライナー・チムニク・作・絵, 矢川 澄子・訳/徳間書店/2018. 7(「クレーン/タイコたたきの夢」(福武文庫 1991年刊)の抜粋)/¥1400/(943. 7)
★	小低・小中	『コクルおばあさんとねこ』/フィリパ・ピアス・作, アントニー・メイトランド・絵, 前田 三恵子・訳/徳間書店/2018. 4(「おばあさん空をとぶ」(文研出版 1972年刊)の改題改訂)/¥1300/(933. 7)
	小低・小中	『四人のヤッコ』(おはなしのくに)/西内 ミナミ・作, はた こうしろう・絵/鈴木出版/2018. 4/¥1200/(913. 6)
★	小中	『おひとよしのりゅう 2刷』/ケネス＝グレイアム・作, 石井 桃子・訳, 寺島 竜一・画/学研プラス/2018. 1(1966年刊の抜粋)/一般流通せず/(933. 7)
	小中	『かぼちゃ人類学入門』(たくさんのふしぎ傑作集)/川原田 徹・さく/福音館書店/2018. 6/¥1300/(913. 6)
	小中・小高	『魔女のむすこたち』(岩波少年文庫)/カレル・ポラーチェク・作, 小野田 澄子・訳/岩波書店/2018. 9(1969年刊の再刊)/¥720/(989. 53)

★	小中	『ポケットのなかのジェーン』(四つの人形のお話)/ルーマー・ゴッデン・作, プルーデンス・ソワード・さし絵, 久慈 美貴・訳, たかお ゆうこ・装画/徳間書店/2018. 6(「ポケットのジェーン」(福武書店 1990年刊)の改題)/¥1400/(933. 7)
	小中	『ゆうえんちのわたあめちゃん』(四つの人形のお話)/ルーマー・ゴッデン・作, プルーデンス・ソワード・さし絵, 久慈 美貴・訳, たかお ゆうこ・装画/徳間書店/2018. 8(福武書店 1990年刊の再刊)/¥1400/(933. 7)
	小中	『クリスマスの女の子』(四つの人形のお話)/ルーマー・ゴッデン・作, 久慈 美貴・訳, たかお ゆうこ・絵/徳間書店/2018. 10(福武書店 1989年の再刊)/¥1400/(933. 7)

■新シリーズ

	小中・小高	『子ぶたのトリュフ』/ヘレン・ピーターズ・文, エリー・スノードン・絵, もりうち すみこ・訳/さ・え・ら書房/2018. 1/¥1400/(933. 7)
	小中・小高	『子ガモのボタン』/ヘレン・ピーターズ・文, エリー・スノードン・絵, もりうち すみこ・訳/さ・え・ら書房/2018. 7/¥1400/(933. 7)
	小中・小高	『ホオズキくんのオバケ事件簿 1 オバケが見える転校生!』/富安 陽子・作, 小松 良佳・絵/ポプラ社/2018. 9/¥1000/(913. 6)
	小中	『ハートウッドホテル 1 ねずみのモナと秘密のドア』/ケイリー・ジョージ・作, 久保 陽子・訳, 高橋 和枝・絵/童心社/2018. 10/¥1300/(933. 7)
	小高	『ステラ・モンゴメリーの冒険 1 海辺の町の怪事件』/ジュディス・ロッセル・作, 日当 陽子・訳/評論社/2018. 12/¥1800/(933. 7)
	小高・YA	『火狩りの王 1 春ノ火』/日向 理恵子・作, 山田 章博・絵/ほるぷ出版/2018. 12/¥1600/(913. 6)

■シリーズ続刊・完結

	小中・小高	『西遊記 12 珠の巻』(齊藤洋の西遊記シリーズ)/呉 承恩・作, 齊藤 洋・文, 広瀬 弦・絵/理論社/2018. 1/¥1500/(923. 5)
	小高	『パディントンのどろぼう退治』/マイケル・ボンド・作, ペギー・フォートナムほか・絵, 三辺 律子・訳/WAVE出版/2018. 1/¥1400/(933. 7)
	小高	『パディントン、映画に出る』/マイケル・ボンド・作, ペギー・フォートナムほか・絵, 三辺 律子・訳/WAVE出版/2018. 3/¥1400/(933. 7)
	小中	『プレゼントは魔法のほうき』(見習い魔女ベラ・ドンナ)/ルース・サイムズ・作, 神戸 万知・訳, はた こうしろう・絵/ポプラ社/2018. 1/¥1200/(933. 7)
	小低・小中	『キダマッチ先生! 2 先生かんじゃを食べちゃった! ?』/今井 恭子・文/BL出版/2018. 2/¥1300/(913. 6)
	小高	『なみきビブリオバトル・ストーリー 2 決戦は学校公開日』/森川 成美ほか・作/さ・え・ら書房/2018. 2/¥1400/(913. 6)
	小中・小高	『妖怪一家の温泉ツアー』(妖怪一家九十九さん)/富安 陽子・作/理論社/2018. 2/¥1300/(913. 6)
	小中	『菜の子ちゃんとキツネカ士』(福音館創作童話シリーズ)/富安 陽子・作/福音館書店/2018. 5/¥1400/(913. 6)
	小上・YA~	『都会(まち)のトム&ソーヤ 15 エアポケット』(YA! ENTERTAINMENT)/はやみね かおる・著, にし けいこ・画/講談社/2018. 3/¥1000/(913. 6)

小低	『まかせて！母ちゃん！！』/くすのき しげのり・作, 小泉 るみ子・絵/文溪堂/2018. 4/¥1300/(913. 6)
小中	『雨ふる本屋と雨もりの森』/日向 理恵子・作, 吉田 尚令・絵/童心社/2018. 6/¥1400/(913. 6)
小高	『シロガラス 5 青い目のふたご』/佐藤 多佳子・著/偕成社/2018. 7/¥900/(913. 6)
小初	『しゅくだいクロール』(とっておきのどうわ)/福田 岩緒・作・絵/PHP研究所/2018. 6/¥1200/(913. 6)
小中	『ケイゾウさんの春・夏・秋・冬』(わくわくライブラリー)/市川 宣子・さく, さとう あや・え/講談社/2018. 8/¥1400/(913. 6)
小中・小高	『くろグミ団は名探偵 S博士を追い！』/ユリアン・プレス・作・絵, 大社 玲子・訳/岩波書店/2018. 8/¥1300/(943. 7)
小中・小高	『くろグミ団は名探偵 消えた楽譜』/ユリアン・プレス・作・絵, 大社 玲子・訳/岩波書店/2018. 12/¥1300/(943. 7)
小低・小中	『キダマッチ先生！ 3 先生手紙をかく』/今井 恭子・文, 岡本 順・絵/BL出版/2018. 10/¥1300/(913. 6)
小高	『ぎりぎりの本屋さん』(講談社・文学の扉)/まはら 三桃ほか・著/講談社/2018. 10/¥1400/(913. 68)
小中	『風と行く者 守り人外伝』(偕成社ワンダーランド)/上橋 菜穂子・作, 佐竹 美保・絵/偕成社/2018. 12/¥1800/(913. 6)
小高	『ホテルやまのなか小学校の時間割』(みちくさパレット)/小松原 宏子・作, 亀岡 亜希子・絵/PHP研究所/2018. 12/¥1300/(913. 6)
小上・YA~	『神々と戦士たち 5 最後の戦い(全5巻)』/ミシェル・ペイヴァー・著, 中谷 友紀子・訳/あすなろ書房/2018. 2/¥1900/(933. 7)
小上・中	『アーチャー・グリーンと伝説の魔術師』(アーチャー・グリーンと魔法図書館)/D. D. エヴェレスト・著, こだま ともこ・訳, 石津 昌嗣・画/あすなろ書房/2018. 2/¥2200/(933. 7)
小上・YA~	『ある子ども 〈ギヴァー4部作〉完結編』/ロイス・ローリー・著, 島津 やよい・訳/新評論/2018. 4/¥2400/(933. 7)
小高	『フォックスクラフト 3 アイラと純白のキツネ(全3巻)』/インバリ・イセーレス・著, 井上 里・訳/静山社/2018. 7/¥1700/(933. 7)

公益財団法人図書館振興財団
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録
■フィクションの部■

講演：公益財団法人図書館振興財団 児童書選書委員会 岩村 陽恵

児童書選書委員会の岩村陽恵です。東京都内の図書館非常勤職員 児童担当として、日々選書やお話し会に携わっています。図書館振興財団の児童書選書委員会（以下「選書委員会」）では、月に1度、絵本、フィクション、ノンフィクションの新刊について話し合いが行われています。

本日は、選書委員会でお薦めのフィクションとして取り上げられた作品を中心に、出版や時世の点から、話題になった本、評価が良かった本などについて、お話していきたいと思います。発表の内容は、選書委員会や児童書の勉強会、職場の仲間の意見などを参考にしていますが、最終的に私自身の責任で選書し、まとめたものとなります。

■2018年のフィクションの傾向

では、2018年の傾向についてお話していきたいと思います。2018年フィクションの中で、読み応えのある力強い作品が、はっきりとした主題を持っている、高学年や青少年向けのものが多かったように思います。ここ数年続いている傾向ですが、2018年も人種やジェンダー、LGBTQなど、難解な問題に正面から向き合う主人公を丁寧に描いた作品が多く出版されました。今回の発表では、幾つかのテーマに分けて作品を紹介させていただきますが、スポーツ、家族、学校と友達などのテーマの枠を超えて、生きることに困難さを抱える主人公が登場します。

リアルな世界が積極的に描かれた一方で、ファンタジーや冒険物語が少なく、少し寂しい思いがしました。現代とは違う世界を見せてくれる作品としては、歴史物語の中に印象に残った作品がありました。

■日本の文化・歴史

では早速、日本の文化・歴史からテーマ別に本を紹介していきます。数年前から日本の文化・歴史をテーマにした作品が増えていますが、取り上げる素材の幅も広がっています。

まず紹介するのは、違う境遇で生きる13歳の2人の少年が活躍する奈良時代の物語です。『[天からの神火](#)』。郡を収める有力者である長官の息子、柚麻呂は、弓の上手な郷の少年、早矢太と出会います。早矢太は父親が徴兵から帰らず、祖母や姉たちと暮らすたくましい少年です。学問も武術も苦手な柚麻呂は、早矢太に憧れ成長していきます。歴史物語の入門編といえる作品です。後書きの後ろに、奈良時代のお話のブックリストも付いています（p. 159）。作者の奈良時代愛を感じるブックリストでいいなと思います。ぜひご覧になってみてください。

続いて『[さよ 十二歳の刺客](#)』。平安末期から鎌倉時代が舞台です。壇ノ浦の戦いで、海に身を投げた平家の姫、さよが主人公です。1人生き延びたさよは出生を隠して、奥州平泉近くの荘園領主に引き取られて暮らしていました。一族を滅ぼした源義経に復讐する野望を持つさよ。客人として平泉に来た義経から、息子の遊び相手に取り立てられて、物語はドラマチックに展開していきます。「もし、平泉に逃れた源義経と、平家の姫が出会ったら」という作者の想像から生まれた物語です。歴史から人間がどういうものか、どう生きるのかということを知ったり、考えたりしてほしいという作者の願いが込められています。

どちらの作品も、作者の歴史や文化に対する愛情が、作品の魅力として生きている物語であると思います。

■スポーツ

2020年に向けてスポーツをテーマにした作品がもっと増えるかと期待しましたが、ここ数年の中で飛び抜けて多いということはありませんでした。日本の作品の中では、スポーツや運動そのものを描いたものもありましたが、外国の作品では、特にスポーツと絡めて、主人公がそれぞれの考え方や生き方を模索する物語や、多様性について取り扱った作品が目立ちました。

まず、親しみやすい日本の作品を紹介します。『[ぼくらの一歩](#)』。6年生の水口萌花は、時期外れの転校生です。転校先のクラスメートは、萌花が来たことにすごく大喜びします。理由は、萌花が加わることで人数が揃い、クラス全員で30人31脚に出場することができるようになったためでした。もともと足の遅い萌花は断れない状況の中で、鬼キャプテンの厳しい朝練を耐え抜いていきます。クラスメート3人の目線で、30人31脚に取り組む仲間の物語が語られます。作者いとうみくは、毎年印象に残る作品を発表していますが、今年私が良かったと思ったのは本作です。

外国の作品から、スポーツとジェンダーについて取り上げた『[その魔球に、まだ名はない](#)』を紹介します。1950年代のアメリカが舞台です。主人公のゴードンは、もうすぐ10歳。誰も打てない魔球を投げる草野球チームの名ピッチャーです。リトルリーグの選抜試験に見事合格しますが、ゴードンが女の子だということが分かったと「ルール違反」、女子は対象外だと伝えられてしまいます。野球は男子専用のスポーツだろうか。壁にぶつかっても、泣いても立ち上がる彼女は、自分の歩む道を模索し始めます。性別、人種への差別や偏見について改めて考えさせられる、自分らしくあることを強く応援してくれる物語です。図書館や自由研究といったキーワードが物語の中に出てきます。印象的な表紙、挿絵は早川世詩男によるもので、今年のフィクションのリストで大活躍のイラストレーターです。

■平和を求めて

続くテーマは「平和を求めて」です。戦後70年を過ぎてから、日本の戦争体験を扱った物語は少なくなっていると感じます。一方で、視点を変え戦争を捉える作品が多かったように思います。戦争や移民といった人種の問題が絡む物語が多くありました。また、難民についての本がフィクションの分野でも増えているように思います。

まず、『[マンザナの風にのせて](#)』。1941年の真珠湾攻撃後、生活が一変した日系アメリカ人の家族が体験する、強制収容所での生活を描いた作品です。物語は1942年3月に始まります。戦争によってマナミの一家は住んでいた家の立ち退きを余儀なくされ、マンザナの強制収容所へ入ります。きちんとした説明も受けぬまま以前の生活を捨てさせられ、家族の一員であった愛犬のトモとも辛い別れ方をし、マナミはショックから声を失ってしまいます。この物語は、マナミの目を通して見たアメリカの日系人の戦争体験です。本文は挿絵が少なく文字も小さく感じますが、難しい文章ではありません。作者や訳者による後書きは写真解説が充実していて、ぜひ最後まで読んでいただきたいと思います。大人が紹介することで、特に生きてくる本です。

次は『[風がはこんだ物語](#)』。海に浮かぶ一艘のボートは、8人の難民を乗せて漂っています。難民の中の1人は、14歳のバイオリンを持った少年です。彼はボートの上で自由の歌、風のような物語を語り、演奏し始めます。それは皆さんもよくご存じの『スーホの白い馬』の物語です。少年がつむぎ出す音楽と物語をきっかけに、乗り合わせた人々が自分自身の体験を語り始めます。故郷を追われた人々の悲しみと、音楽や物語、そして文学が持つ力を伝えるお話です。フィクションであるからこそ伝えられる方法で、難民問題について読者の心へ訴え掛けてきます。挿絵が豊富で、図書リストでは高学年から中学生までと利用対象を表示していますが、大人まで幅広く紹介できるのではないかと思います。

もう1冊紹介したい日系アメリカ人の戦争の物語は、『[マレスケの虹](#)』です。1941年7月から1944年11月、太平洋戦争の開戦前から終戦前までのハワイを舞台とした作品です。日系2世の少年マレスケは、小さな「コニストア」を営む祖父、姉、兄と暮らしていました。1941年の12月にパールハーバーが日本軍に攻撃され、ハワイで暮らす日系人たちは「敵国人」とその家族と呼ばれるようになり、息苦しい生活へと変わっていきます。マレスケの「ぼくはアメリカ人だし、もちろんアメリカの側に立っているつもりだ。～中略～日本はぼくらを裏切り、アメリカはぼくらを疑っている」(p. 164)という言葉が印象的です。アメリカ側であるハワイで日系人がどのように生きたのか、中学2年生の少年の目線で語られていきます。この作品は、高学年より上の年代に広くお薦めできる本であるように思います。

今年は『[マンザナの風に](#)』と『[マレスケの虹](#)』が一緒に出版されるなど、外側から日本の戦争を見るという視点で作られた本が多かったように思います。そこで図書リストには、『[母が作ってくれたすごろく](#)』という本も加えました。インドネシアの日本軍の抑留所での体験について、オランダ人の女性が子どもの頃の記憶を元に綴ったものです。子どもに紹介するには、少し大人が手を貸した方がいい本だとは思いますが、子どもと本に関わる大人の方々に知っていただけたらいい本だと思います。

マイケル・モーパーゴによる、戦争をテーマとした作品『[トンネルの向こうに](#)』。舞台は第二次世界大戦下のイギリス。空襲で家をなくした10歳のバーニーは、お母さんとロンドン行きの汽車に乗っていました。その汽車はドイツ軍の戦闘機に襲撃され、トンネルへと逃げ込みます。戦闘機が行ってしまうまでトンネルの暗闇の中で待つこととなりますが、同じ客車に乗り合わせたおじさんが暗闇を怖がるバーニーに、第一次世界大戦中に活躍したビリー・バイロンという兵士の話を語ってくれます。勇敢で優しい兵士ビリーは、戦場で1人の敵の兵士を逃がしてやりません。しかしその後、その男が第二次世界大戦を引き起こすということが分かってきます。実際にビリーのモデルとなった兵士がいて、その兵士に献辞が捧げられている本です。モーパーゴのこの物語への思い入れが感じられます。

■家族

次のテーマは「家族」です。今年の家族の物語は、父親との関係を中心に描いたものがとても多くありました。1冊目は『[ペーパープレーン](#)』。日本では2017年12月に出版された作品ですが、私のお気に入りであるため紹介させていただきます。主人公である12歳の少年ディランは、オーストラリアの小さな町でパパと2人暮らしです。5カ月前にママを交通事故で亡くし、パパは悲しみから立ち直れず、仕事にも行けない状態です。ある日、ディランは小学校の授業で紙飛行機を飛ばしますが、紙飛行機はなんと69メートルも飛び、ディランは州の紙飛行機大会

に参加することを決めます。このディランのチャレンジを中心に、お父さん、クラスメート、ライバルとの関係がさわやかに、読後感良く描かれていきます。高学年向けの作品です。巻末には紙飛行機の作り方が載っていて、こちらも表紙挿絵共に早川世詩男によるものです。「ヤングケアラー」という言葉もよぎるようなお話です。

もう1冊、父と子、そして故郷にまつわる物語を紹介します。『ソロモンの白いキツネ』。このお話でも、妻に先立たれたお父さんが描かれています。12歳のソロモンはシアトルの港で働くお父さんと2人暮らし。お父さんは、ソロモンが2歳の時に妻を事故で亡くし、思い出の詰まった故郷のアラスカで働き暮らすことが辛すぎるために、息子を連れてシアトルへ移ってきます。しかしソロモンは、人種の問題などで小学校ではいじめられ、孤独を感じ、両親と自分の故郷のアラスカに行ってみたく願っています。そんなある日、港に白いホッキョクギツネが現れ、ソロモンは故郷から遠く離れた港で捕えられてしまったキツネに心を寄せて、アラスカに帰したいと考えます。カラーの挿絵が多用されていますが、大人っぽい印象で高学年に薦めやすい本であると思います。

■学校と友達

「学校と友達」というテーマから、まず日本の作品を3つ紹介します。

ちょっと不思議なことが起こる『消えた時間割』。毎週クラスで配られる時間割予定に墨汁の汚れが付いてしまったことが、全ての出来事の始まりでした。クラスの何人かがそのシミの付いた時間割をもらうことになりますが、墨汁のシミで消えたものが、現実の世界でも消えてしまうという噂が広がります。菜々子ちゃんがもらった時間割では、月曜日の「体育 鉄ぼう」の文字が消えていました。ちょっとした事件が起こり、菜々子ちゃんは苦手な体育を休むこととなります。クラスの生徒たちが、消えた時間割のことを順々に語り出します…。挿絵もとても多く、中学年の子どもたちにお薦めできる、軽めの物語になっています。

クラウドファンディングやLINEなど、今どきの話題をふんだんに盛り込んだ物語『ドリーム・プロジェクト』を紹介します。主人公の中学2年生の大原拓真は、祖母が亡くなってから同居を始めたおじいさんの勇のことが心配です。拓真はおじいちゃんが思い出の詰まった古い家を懐かしんでいることを知り、何とかしたいと思いはじめます。そこで、クラスメートの日菜子がクラウドファンディングを提案し、協力してくれる仲間と一緒に、祖父の家を地域の人との憩いの場として再生させることを目指し、動き始めます。クラウドファンディングの仕組みなども紹介されていますが、選書委員会では「お話がうまくいきすぎるのでは？」といった感想もありました。お金の取り扱いや、支援者へのリターンといった物や権利をお返しする仕組みなど、実際には苦労が多そうな事柄についての説明がやや少ないという印象があり、もう少し周りの人たちと意見交換をしたいと思った本です。

障害について考えるきっかけをくれる『凸凹あいうえおの手紙』。6年生の大地は、学校の用事で、佐山さんというおばあちゃんのところに招待状を届けることとなります。招待状は郵便受けにきちんと入れたはずなのに、一向に返事が来ません。次の月、また招待状を届けに行った大地は、佐山さんが、目が不自由な人であることを知ります。大地は佐山さんのために、点字の手紙を送ることを思い付き、点訳ボランティアの経験を持つ図書室の先生の力を借りて点字を学び、招待状を書き上げます。読者は物語の中で佐山さんの気持ちに触れることで視覚障がい者の気持

ちに寄り添い、点字や視覚障がいについても目を向けることとなります。最後のページには点字の手紙が付いていて、子どもたちが点字に興味を持てるよう工夫されています。

外国の物語から、学校生活、友達関係の中で困難さを抱える子どもたちを描きつつ、人種問題についても考えさせられる2冊を紹介します。1冊目は『明日のランチはきみと』。インドからアメリカへ引っ越してきたラビと、特別支援学級で、聞こえ過ぎる音の聞き分けを訓練しているジョー。この2人の、5年生最初の1週間を描いた物語です。インドでは教室のスターだったラビは新生活で、いじめっ子、人種、宗教の問題など、様々な困難と直面します。一方ジョーはできるだけいじめられないよう、目立たないように過ごしていますが、実は転校生のラビのことをとてもよく見えています。そんな背景も文化も全く異なる2人ですが、彼らが一歩前に踏みだすきっかけとなる出来事が起こってきます。食べるのが大好きでランチを楽しみにしているジョーと、お弁当を持ってくるラビの個性がよく出ているランチをうまく物語に絡めた、読後感の良い高学年向けの物語です。本書の挿絵も早川世詩男によるものです。

2冊目は『ジュリアが糸をつむいだ日』。アメリカのイリノイ州で暮らす、韓国系アメリカ人のジュリアは7年生。近所に住むパトリックという男の子と大の仲良しです。2人は農業クラブの自由研究で、カイコを育てて生糸を取り、刺しゅうをするというテーマを選びます。そこでジュリアのお母さんが、韓国の刺しゅうを教えてくれることとなりますが、実はジュリアは、いかにも韓国らしい研究をすることが嫌です。一方パトリックは積極的に研究に取り組み、カイコの卵を手に入れるためのお金の算段や、カイコが食べる桑の葉の入手方法など、1つ1つの課題を着実にクリアしていきます。作者のリンダ・スー・パークは、『モギちいさな焼きもの師』（あすなろ書房、2003年11月刊）の作者で、韓国系アメリカ人2世です。そのためジュリアの気持ちなどがとても丁寧に描かれていて、読者はジュリアが取り組む自由研究を通して、一歩深く人種の問題と向き合うこととなります。

先に紹介した『その魔球に、まだ名はない』やこの『ジュリアが糸をつむいだ日』、また今回はリストのみに挙げている、『昨日のぼくのパーツ』など、今年は「自由研究」というキーワードが物語に登場した年でした。

■幼年文学

幼年文学の作品を紹介します。まず、安心して子どもたちに紹介できる作品から『ふたごのカウボーイ』。フローレンス・スロボドキンによるお話です。ある日、双子の兄弟ネッドとドニーは、庭でカウボーイごっこを始めます。2人は青いジャケットに赤いカウボーイハットをかぶり、カウボーイのスティーブとジムになりきります。そして、お尋ね者や動物を見つけに、商店街へ出掛けていきます。主人公は、皆さんもよくご存知の『てぶくろがいっぱい』（偕成社、2008年11月刊）で、赤い手袋をなくしてしまった双子の兄弟のネッドとドニーです。今回は2人だけで遠くまで冒険に出掛けて、前作よりも子どもたちが活発に活動していることが印象的でした。低学年の子どもたちに、安心して広く紹介できます。2冊ともぜひご紹介ください。

次は『こだぬきコロッケ』です。「つきなみ山」に昔からある「たぬばけ道場」。その道場の跡取り息子なのに化けるのが下手な、子だぬきポン吉のお話です。ひょんなことから、タヌキの肉よりもコロッケが好きな腹ぺこオオカミと、村へコロッケを買いに行くことになりました。楽しんで読める幼年童話です。「こぐまのどんどんぶんこ」は、絵本から読み物へステップアップを

応援するシリーズとして刊行されていましたが、2018年9月に出版された『きっちり・しとーるさん』と、『カテリネッタとおにのフライパン』をもってシリーズが完結しました。

幼年童話の中で、困難を抱えている子どもが登場する作品として印象に残った『二年二組のたからばこ』。2年2組には「たからばこ」と呼ばれる箱があります。クラスメートのたからくんの落とした物を見つけたときに入れておく箱です。たからくんは、とにかく落とし物が多い。ノートに書いていると教科書が机から落ちてしまうし、教科書を見ているとノートが落ちてしまう。トイレに行ってもスリッパをはくと、上履きを忘れてきてしまう。主人公のみなは、たからくんの隣の席になってから、いろいろな物を貸してと言われます。たからくんは物を大切にしないから、落としてばかりいると思いはじめます。しかし、鍵がなくなる事件をきっかけに、みなはたからくんの気持ちを知ることになります。子どもたちを取り巻く周りの大人の言葉なども、印象に残った作品でした。先程の「学校と友達」というテーマでまとめたおすすめ本の中に、『こだわっていこう』という村上しいこさんの本がありますが、少し設定が似ているので、読み比べていただくとよいかと思います。読み比べると、大人の立場として読んでいる者には考えさせられる部分もあるように思います。

■その他

その他のおすすめ本を紹介したいと思います。まず、温かくて楽しくて、ユーモアをめいっぱい感じられるような物語を読みたいと思っている人に、『パイパーさんのバス』。翻訳は小宮由。バスの運転手のパイパーさんは一人暮らしで、家族がいないことを寂しいと思うようになります。偶然出会った犬と猫、そしてヒヨコと暮らし始めますが、アパートの大家さんに「動物は飼ってはいけない」と言われてしまいます。そこでパイパーさんは休暇を取り、動物たちをもらってくれる人を探しにバスで田舎へ出掛けていきます。主人公は大人の男性ですが、動物たちに優しくて素朴な人物像が、子どもたちの読者にも受け入れられるのではと感じます。挿絵も生き生きしていて、パイパーさんと動物たちの楽しげな様子がよく伝わってきます。終始おだやかな印象で、中学年の子どもたちに安心して手渡せる作品です。原作は1961年の出版ですが、普遍的な喜びを描いた牧歌的な物語は、少しもさびれないのだということが分かります。

次は、『王への手紙』（上・下巻、岩波書店、2005年11月刊）で知られるトンケ・ドラフトの作品です。紹介するのは『青い月の石』。主人公の10歳の少年ヨーストは、村と森の間にある家で、魔法を知るおばあさんと暮らしています。ある日、学校では子どもたちが古いわらべ歌で遊んでいました。すると、その歌に出てくる地下世界の王、マホッヘルチェが現れて、ヨーストに青い月の石を取りに来るようにと誘います。ヨーストは同じ学校のヤンの協力を得て、同じくマホッヘルチェを追う王子と共に冒険へ出掛けて行きます。古風な雰囲気がありますが、ヨーストとヤンが暮らしていた世界と不思議な世界とが地続きで、いつの間にか入りこんでしまうおとぎ話の入り口は、実は身近に開いているということが感じられるファンタジーです。挿絵もトンケ・ドラフトによるものです。

今年は猫が登場する本が多いという印象がありましたが、私が好きな猫の本を紹介します。『ねこの商売』です。おまんじゅう屋の幸福堂は、この頃売れ行きがよくありません。そんなある日、ご主人は店の目の前で、「猫の手お貸しします。まねきねこ派遣協会」という張り紙を見つけます。思い切って電話をしてみると、本当に猫が派遣されてきて、お店で招き猫として働き始めま

す。お話も絵も昭和の雰囲気がありますが、物語はまっすぐで読みやすく、図書リストでは「小学校中学年」向けとしましたが、2年生くらいからの子どもたちにも紹介できるのではないかと思います。中学年の子どもたちには安心して手渡せる文字の大きさ、漢字は全ルビ、挿絵も多めの作りになっています。

■神話・昔話・詩

「神話・昔話・詩」の本を紹介します。『古事記 日本のはじまり』です。齊藤さんが語る古事記を、耳で聞いているかのように読める本です。目次を見ると分かるように、イザナギとイザナミの2人の神の国づくりをはじめ、古事記前半の有名なお話を押さえていると思います。今、学校図書館はもちろんですが、公共図書館でも日本の神話や昔話を紹介する機会が増えていると感じます。2017年12月に出版された富安陽子さんの『絵物語古事記』（偕成社）が記憶に新しいですが、近年、少しずつ子どもたちに向けた古事記が出版されていますので、併せて読んだり仲間と読み比べをしたりして、どの本をどんなときに紹介すればよいかということを整理しておきたいと、私自身も考えています。

昔話を幼年向けのシリーズの中から、先程も少し触れた「こぐまのどんどんぶんこ」の中から2冊紹介したいと思います。『千びきおおかみ』。昔々、旅の途中で商人が、山の中で日暮れを迎えてしまい、高い木の上で夜を明かすことにしました。夜中になると、そこへオオカミがやってきて、木の上の商人を捕まえようとします。表題作の「千びきおおかみ」のほか、「子育てゆうれい」など、有名な日本の昔話が筒井悦子による再話で、全6話収録されています。幼年向けの怖い日本の昔話が最近読まれていなかったように思いますので、子どもたちに紹介できることを嬉しく思います。

2冊目は『カテリネッタとおにのフライパン』です。剣持弘子による再話で、イタリアの食べ物にまつわるお話を4話収録しています。表題作の「カテリネッタとおにのフライパン」は怖い話でもあります。鬼にフライパンを借りて、お母さんにドーナツを作ってもらったカテリネッタ。フライパンを返すときに、お礼にドーナツをあげるという約束をしていましたが、ドーナツがあまりに美味しかったので、カテリネッタは鬼の分まで全部食べてしまいました。

昔話は耳で聞くことが楽しいのはもちろんですが、読み物としても、低学年の子どもたちが親しみやすい昔話を紹介したいと思います。出版社には、良い再話で出版していただきたいです。

今年のリストの中では唯一の、詩の本を紹介します。谷川俊太郎の、子どもが特に楽しめる詩集『こどもあそびうた』です。「かっぱ」「いるか」など耳で楽しめる詩、「おならうた」「うんこ」など子どもが笑って喜ぶような詩まで、面白い詩を50編も収録しています。編集者の山田馨さんの後書きに、「谷川さんは一九七三年から、ひらがなだけの詩をかくようになりました。～中略～ ひらがながよめればこどもでも詩がたのしめると谷川さんはかんがえたのです」と書いています（p. 154）。装丁と絵は、童話屋の詩の文庫シリーズを長く手掛けているグラフィックデザイナーの島田光雄で、表紙はいいかっぱの顔です。

■新訳

2018年は、児童文学の古典の新訳が多くありました。『ハックルベリー・フィンの冒険上・下』。皆さんもよくご存じのことと思いますが、『トム・ソーヤーの冒険』に続く作品で、ト

ムの親友ハックルベリー・フィンが主人公です。黒人奴隷のジムといかだに乗り、ミシシッピ川を下りながら旅する冒険物語です。訳者である千葉茂樹さんがあとがきの中で、マーク・トウェインが作品の中で巧みに使い分けている方言の再現には重きを置かなかったということ、また黒人を指す差別語の英語について、「くろんぼ」という訳語を一度も使わずに訳したことなどについて書かれていますが、その千葉さんの試みは成功しているように思います。古典の重厚な世界観を揺るがすことなく、現在の子どもたちが読みやすい文章で、当時のアメリカにいたハックやジムの悩みや喜びが、生き生きと伝わってきます。

『アンデルセンのおはなし』。『チムとゆうかんなせんちょうさん』（福音館書店ほか）などで知られるエドワード・アーディゾーニが、アンデルセンのたくさんの物語の中から選び、挿し絵を描いた本が1978年にイギリスで出版されました。今回、それが江國香織の訳で、のら書店から出版されました。アンデルセンが初邦訳化のように読める「しっかりしたスズの兵隊」「皇帝の新しい服」「小さな人魚」「空を飛ぶかばん」などのお話が14編収録されています。江國訳は、読者層が子どもであっても、易しい言葉だけを使うより、その作品に合った言葉を積極的に使うことを選ぶという印象を受けます。読者の読む力を信じている人だと思える訳文だと感じています。

『長くつ下のピッピ』は日本では長らく、大塚勇三訳・桜井誠絵によるシリーズが親しまれていて、この会場の皆さんはこのピッピを読んで育ったのではないかと思います。今回、大塚・桜井コンビのピッピと併存する形で、菱木晃子による新訳のピッピ三部作が出版されました。1作目では、世界一強い女の子ピッピが、ニルソンさんと馬と一緒に「ごたごた荘」に引っ越してきて、隣の家のトミーとアニカとすてきな友達になります。挿絵は原書と同じイングリッド・ヴァン・ニイマンです。「訳者あとがき」に、2016年にスウェーデンで出版された改訂版を基に訳したことが書かれていますが、旧版と改訂版とで、どんな違いがあるのかも解説されています。訳者の菱木氏自身が、大塚・桜井コンビのピッピを子ども時代に楽しんだ1人であり、読者の心にも寄り添って仕事をされていたのだと感じます。ピッピ三部作のタイトル、そして「ごたごた荘」という名前が変わらずに今も残っているのはやはり嬉しいです。

■復刊など

復刊の中からおすすめを紹介します。今年は復刊の数が減ったように感じますが、今の子どもたちに手渡ししやすい形で、丁寧に作られた本がたくさんありました。1冊目は、フィリパ・ピアスの『コクルおばあさんとねこ』です。風船売りのコクルおばあさんの大切な黒猫が家出をしてしまい、おばあさんは悲しみのせいで痩せ細ってしまいます。そしてある風の強い日、風船と一緒に空へ舞い上がってしまいます。1972年文研出版刊の『おばあさん空を飛ぶ』という作品の改題です。今回、魅力的なアントニー・メイトランドの挿絵で復刊されました。新版旧版を並べてみると、挿絵はどちらもそれぞれ世界観がありますが、受ける印象は全く異なります。短いお話ですが、「さすがフィリパ・ピアス」と思わせてくれる物語でした。私自身、今年一番読んでいて嬉しかった本です。ぜひ皆さんも、手に取ってみてください。

ケネス・グレイアム作の『おひとよしのりゅう』。残念ながら一般には流通していない本ですが、紹介します。本が大好きな羊飼いの息子が、お人よしで少しものぐさな竜と友達になり、その竜の危機を救おうとするお話です。1966年に学研より出版された石井桃子訳の『おひとよ

『しのりゅう』から表題作のみ抜粋され、今回ソフトカバーで出版されました。インガ・ムーア絵・中川千尋による訳『のんきなりゅう』（徳間書店、2006年7月刊）をご記憶の方もいらっしゃると思いますが、『のんきなりゅう』には、挿絵を描いたインガ・ムーアが要約した部分が文章の中にあるそうです。石井桃子訳と比べて読んでみると「なるほど」と感じます。この作品は『ものぐさドラゴン』（金の星社、1978年6月刊）、青土社による短編集『ものぐさドラゴン』（1999年8月刊）でも紹介されています。そちらでは、『おひとよしのりゅう』や『のんきなりゅう』で省略されていた部分も読むことができます。興味がおありの方は、ぜひ探してみてください。

続いて、『ポケットのなかのジェーン』。10センチほどの陶器の人形ジェーンは、冒険に憧れています。ある時、ギデオンという男の子が、ポケットに入れて外に連れて行ってほしいというジェーンの願いをかなえてくれます。本作は、1990年に福武書店より刊行された「四つの人形のお話」というシリーズの1冊で、今回表紙を変えて出版されました。シリーズの中で本作品は猪熊葉子訳で『元気なポケット人形』（岩波書店、1979年刊）というタイトルでも出版されていたことが分かりました。挿絵は『魔女たちのパーティ』（佑学社ほか）のアドリエンヌ・アダムズです。こちらも面白いので、興味がある方はぜひ比べ読みをしてみてください。新しい「四つの人形のお話」シリーズは、2019年1月に4巻目の『ふしぎなようせい人形』が刊行され、全て揃いました。

最後に、図書リストには「新シリーズ」および「シリーズ続刊・完結」をそれぞれまとめました。選書等で必要な方はご覧になってみてください。以前より続いていたシリーズ作品では、『神々と戦士たち』、『アーチャー・グリーンと伝説の魔術師』、『ある子ども（ギヴァー4部作）』、『フォックスクラフト』などが完結しました。

■最後に

以上で、本の紹介は終わりますが、最後に2018年の子どもの本を読んだ後の、素朴な感想をお話したいと思います。近年、生きにくさを感じている子どもたちを描いた作品が多く出版されていると感じていました。ジェンダー、人種、移民、LGBTQといったキーワードにスポットが当てられた物語が小学生向けに次々に出てくる状況に、もはや驚かなくなりました。そんな中、今年は困難な状況にあっても救われる道を見つける主人公が多く、読んでいて正直ホッとしました。そして、自分とは違う相手をどう受け止めるか、受け入れるかという問いを根っこに持つお話が多く、本来当たり前でもあるその問いかけに、改めて立ち返ることができました。今まで読んできた本の中には、登場人物の子どもたちが置かれる状況の過酷さばかりが気になってしまい、物語が持つものの本質に気づくことができないこともあったと私自身反省しました。そして、物語を読んで救われたと思うことや、「ハッピーエンド」という児童文学らしい結末が、子どもの頃の私自身にはとても重要であったことを思い返す機会になりました。決して、子どもに向けた物語が必ずハッピーエンドでなくてはならないというつもりはありません。しかし、物語の中の希望といったものに、子ども時代の私がどれほど支えられたかということ、物語が私に果たしてくれた役割というものを改めて考えさせられる1年になりました。

リスト発表を支えてくれた皆さん、発表を最後まで聞いてくださった皆さんに、感謝します。どうもありがとうございました。

(於：株式会社図書館流通センター 2019年3月13日・14日)
※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。